東アジア戦略概観

East Asian Strategic Review

2002

防衛庁防衛研究所編

『東アジア戦略概観2002』の編集執筆にあたっては、以下の方々から貴重なご意見を頂いた。この場を借りて、深く感謝の意を表したい。

メリー・アンソニー（シンガポール防衛戦略研究所助教授）
江畑謙介（軍事評論家）
マイケル・オハンロン（米国ブルッキングス研究所上級研究員）
金聖翰（韓国・外交安全保障研究所副教授）
倉田秀也（杏林大学助教授）
高原明生（立教大学教授）
沈丁立（中国・復旦大学米国研究センター副主任）
袴田茂樹（青山学院大学教授）　(50音順：敬称略)

『東アジア戦略概観2002』
日本語版編集・執筆スタッフ
伊豆山真理、上野英詞、大野拓人、小野圭司、小塚郁也、小柳順一、
近藤重克（編集長）、齋藤勉、坂口賀朗、佐藤丙午、醍醐ともえ、高木誠一郎、
塚本勝也、恒川潤、松田康博、間山克彦、道下徳成、宮原靖郁、室岡鉄夫、湯浅剛
(50音順)

はしがき

本書は、東アジアの安全保障環境について、2001年１月から12月までの１年間の動向を記述の対象にしている。2001年は、当初、米国のブッシュ新政権の東アジアに対する政策、また国防戦略の見直しの中でこの地域における米軍のプレゼンスにどのような変化が生じるかに注目が集まっていた。しかし、９月11日に米国で生じた同時多発テロによって、テロ問題が大きく浮上するに至った。国際テロが今後の米国の安全保障政策、また、国際関係にどのような影響を及ぼすかは定かではない。東アジア諸国は、米国に対する国際テロへの批判では一致したが、アフガニスタンでの軍事作戦に対しては、この地域の多様性が反映し、対応が分かれた。また、国際テロの陰に隠れたが、2000年に東アジアの平和と安定にとって１つの明るい兆候であると歓迎された南北朝鮮間の歩み寄りの動きは、2001年に入って急速に停滞を見せることになった。

東アジアを平和で繁栄した地域にするためには、我々の置かれた地域の安全保障環境をできるだけ客観的に理解することが重要である。『東アジア戦略概観』はこうした立場を踏まえ、防衛研究所の研究者が独自の視点から東アジア地域の戦略環境を分析したものである。したがって、本書は、政府および防衛庁の見解を示すものではないということをお断りしておく。

防衛研究所は、国際安全保障および戦史について研究するとともに、諸外国の国防大学に相当する教育を行っている。また、防衛研究交流などを通じて、我が国の隣国である中国、ロシア、韓国およびASEAN諸国と安全保障対話を推進している。2001年８月には、防衛研究所は第５回ARF国防大学校長等会議を開催した。防衛研究所が行う国際交流は、地域の安全保障についてさまざまな視点から議論し、意見を交換することによってこそ、各国間の誤解を減らし信頼を高めることが可能だという考え方に基づいている。防衛研究所は、『防衛研究所紀要』やホームページ（http://www.nids.go.jp）を通じて、広く情報発信を行っており、本書『東アジア戦略概観』もその一環として出版されている。

本書は２部構成で、第１部は地域にまたがる安全保障問題をトピックスとして取り上げ、第２部は、朝鮮半島、中国およびロシアの地域情勢と、米国の東アジア政策および日本の防衛政策を記述している。第１部のトピックスとしては、2001年に最も注目を集めることになった９月11日の米国同時多発テロへの東アジアの対応、東南アジア情勢、東アジアに隣接する大国インドの核政策を分析した。本書が読者にとって東アジアの戦略環境を理解する一助となることを希望し、議論を喚起するものとなることを期待している。

平成14年（2002年）２月

防衛庁　防衛研究所第１研究部長
編集長　近藤重克